

ヘーゲル『精神現象学』 「序説」 第33節～第35節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

76

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

2018-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014417>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第33節～第35節の解明

山口 誠 一

はじめに

『精神現象学』「序説」の3つの節の邦語訳・注解・要旨を通じて、精神の形成陶冶が、学的哲学の場面へ到る過程を解明する。

凡 例

1. 原文の隔字体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。
2. 『精神現象学』第二版刊行に際し推敲された箇所は、本論稿原文直下に表示した。
3. 訳文については、「精神現象学・序論」、山本信訳、岩崎武雄責任編集・解説『世界の名著 35・ヘーゲル』所収、中央公論社、昭和42年を参照した。
4. [] で括った表記は、筆者による挿入である。

〔9〕 表象されたものと熟知されたものを概念に転換すること

《第33節》

【要旨】

【a】 普遍性一般への高まりは形成陶冶の完成ではない。古代と近代の学修様式とは違っている。古代の形成陶冶は普遍性への自己形成である。近代の形成陶冶には普遍性は準備されている。近代の形成陶冶は内的形式の出現である。

【b】 なすべき仕事は個人を現実化し精神化することである。思想の流動化ははるかに困難である。思惟規定の自己を流動化することは、存在そのものを流動化することよりもはるかに困難である。

【c】 思想は、自ら自身だという純粹確信を捨象することによって流動化する。思想は、内発的に固定したところを放棄し流動化する。思想の流動化は、概念の自己運動となる。

【a】

(1) 普遍性一般への高まりは形成陶冶の完成ではない。

Daß das Vorgestellte Eigentum des reinen Selbstbewußtseins wird, diese Erhebung zur

Allgemeinheit überhaupt ist nur die eine Seite, noch nicht die vollendete Bildung.

表象されたものが純粹自己意識の所有となり、普遍性一般に高められることは、〔形成陶冶の〕一つの側面にすぎないのであって、まだその完成ではない。

《註解》ここでの「普遍性一般」とは、《第4節》の冒頭で「事象一般」といわれていた。それは、実体的生活から脱却する形成陶冶の手始めの場面である。

(2) 古代と近代の学修様式とは違っている。

— Die Art des Studiums der alten Zeit hat diese Verschiedenheit von dem der neueren, daß jenes die eigentliche Durchbildung des natürlichen Bewußtseins war.

古代の学修様式と近代のそれとは、つぎの点で異なっている。前者は、自然的意識を本来の意味で形成陶冶しきることであった。

《註解》ここから、古代の形成陶冶とは、個人の自然的意識を普遍化することだったことがわかる。しかし、『精神現象学』の形成陶冶では、その手始めの段階になる。なお、形成陶冶（教養形成）の手始めについては序説《第4節》を参照されたい。

(3) 古代の形成陶冶は普遍性への自己形成である。

An jedem Teile seines Daseins sich besonders versuchend und über alles Vorkommende philosophierend, erzeugte es sich zu einer durch und durch betätigten Allgemeinheit.

自然的意識は、自分の生存のあらゆる部分に関して、ことさらに自分を試み、出会うものすべてについて哲学することによって、徹頭徹尾、実地にきたえられた普遍性へと自分を作り上げていった。

《註解》たとえば、アリストテレス『形而上学』第1巻第1章冒頭では、個別的なものの経験から普遍的判断への道が表明されている（981a6-7）。また、『形而上学』としての第一哲学が普遍学であるとされている（1026a）。

(4) 近代の形成陶冶には普遍性は準備されている。

In der neueren Zeit hingegen findet das Individuum die abstrakte Form vorbereitet;

それに反して近代においては、〔普遍性という〕抽象的形式はすでに個人（個体）にとって準備されている。

《註解》抽象的形式は、定在の多様性の具体性と対比させて用いられている。たとえば、カントは、直観の形式や思惟の形式を前提にした上で、それを現象に適用した。

(5) 近代の形成陶冶は内的形式の出現である。

die Anstrengung, sie zu ergreifen und sich zu eigen zu machen, ist mehr das unvermittelte Hervortreiben des Innern und abgeschnittene Erzeugen des Allgemeinen als ein Hervorgehen

desselben aus dem Konkreten und der Mannigfaltigkeit des Daseins.

この抽象的形式をとらえて自分のものにするための努力といっても、それは、定在の具体的にして多様な状態から普遍的なものを出現せしめることというよりは、むしろ内なるものがそのまま出現することであり、普遍的なものを産出する過程をきりすてることである。

《註解》ヘーゲルによれば、理念は概念と実在の統一であるから、ここでの形式としての普遍性は純粹概念である。das unvermittelte Hervortreiben des Innern に近い表現としては、純粹透見が概念を出現させる (den Begriff hervortreibt [Phän. S. 373]) という箇所がある。

【b】

(6) なすべき仕事は個人を現実化し精神化することである。

Jetzt besteht darum die Arbeit nicht so sehr darin, das Individuum aus der unmittelbaren sinnlichen Weise zu reinigen und es zur gedachten und denkenden Substanz zu machen, als vielmehr in dem Entgegengesetzten, durch das Aufheben der festen, bestimmten Gedanken das Allgemeine zu verwirklichen und zu begeistern.

したがって、今やなすべき仕事は、個人（個体）を直接的で感性的なあり方から純化して、思考される実体と思考する実体にするものであるよりは、むしろその逆のこと、すなわち、固定した規定的思想を破棄することにより、普遍的なものを現実化し精神化することである。

《註解》こうして精神の形成陶冶の第一段階は、「個人（個体）を直接的で感性的なあり方から純化して、思考される実体と思考する実体にする」ことであり、これは古代ギリシャにおいて達成されており、『精神現象学』では、「理性」までの課題であった。第二段階は、「固定した規定的思想を破棄することにより、普遍的なものを現実化し精神化すること」であり、「精神」以降の課題であった。すなわち実体を主体としてとらえることであった。

(7) 思想の流動化ははるかに困難である。

Es ist aber weit schwerer, die festen Gedanken in Flüssigkeit zu bringen, als das sinnliche Dasein.

しかし、固定した思想を流動的にすることは、感性的な定在をそうすることよりも、はるかに困難である。

《註解》ここでの Gedanken とは、意識の考えということで、純粹思想としての思惟規定ではない。ヘーゲルは、古代ギリシャで、感性的定在から固定した思想への純化が行われたと考えている。そして、この思想の流動化はカントでもなされなかったと考えている。

(8) 思惟規定の自己を流動化することは、存在そのものを流動化することよりもはるかに困難である。

Der Grund ist das vorhin Angegebene; jene Bestimmungen haben das Ich, die Macht des

Negativen oder die reine Wirklichkeit zur Substanz und zum Element ihres Daseins; die sinnlichen Bestimmungen dagegen nur die unmächtige abstrakte Unmittelbarkeit oder das Sein als solches.

その理由は先に述べられている。すなわち、感性的な諸規定の実体をなし、それらの諸規定が定在する場面となっているのは、威力のない抽象的直接性、あるいは存在そのものにすぎないのに対し、思惟諸規定においてそれにあたるものは、我、否定的なものの威力、純粹現実態であるからである。

《註解》ここで「威力のない抽象的直接性」「存在そのもの」は、『精神現象学』「感性的確信」における「このもの」である。「このもの」が、「感性的な諸規定の実体」であることが明言されている。それにたいして、思惟規定の実体は、「我」、「否定的なものの威力」、「純粹現実態」でもある。この三つの意味を含んでいる実体が自己 (Selbst) である。すなわち本質的には主体であるような実体である。『精神現象学』は、「感性的な諸規定の実体」から思惟規定の実体への展開も含んでいる。また、抽象的直接性の威力欠如と否定的なものの威力とが対比されていることも重要である。なお、自己としての「純粹現実態」については《第22節》(7)(8)を参照されたい。

【c】

(9) 思想は、自ら自身だという純粹確信を捨象することによって流動化する。

Die Gedanken werden flüssig, indem das reine Denken, diese innere *Unmittelbarkeit*, sich als Moment erkennt, oder indem die reine Gewißheit seiner selbst von sich abstrahiert, — nicht sich wegläßt, auf die Seite setzt,

思想が流動的になるためには、純粹思惟というこの内面的な直接性が、自分を契機にすぎないものとして認め、自ら自身だという純粹確信が、自らを捨象しなければならない。とはいっても、その確信そのものを投げ捨て、除去してしまえというのではない。

《註解》純粹思惟に自ら自身だという内面的な直接性がここで認容されている。純粹思惟そのものは『論理学』の場面であるが、自ら自身だという確信は『精神現象学』の内面的直接性の場面である。つまり、純粹思惟も意識もこの点では変わらないのである。この点については、《第37節》総註を参照されたい。

(10) 思想は、内発的に固定したところを放棄し流動化する。

sondern das *Fixe* ihres Sichselbstsetzens aufgibt, sowohl das Fixe des reinen Konkreten, welches Ich selbst im Gegensatze gegen unterschiedenen Inhalt ist, als das *Fixe* von Unterschiedenen, die, im Elemente des reinen Denkens gesetzt, an jener Unbedingtheit des Ich Anteil haben.

むしろ、思想が自分自身を設定するときの固定したところを放棄するのである。そのさい、我そのものが、区別をそなえた内容との対立において、純粹に具体的なものとして立てられるという固定性もあ

るし、また、区別を^{そなえたもの}が純粹思惟の場面において設定され、あの我の無制約性にあずかって得た固定性もあるが、両方とも放棄するのである。

《註解》ここでは、思想が、意識の形態内容と思惟規定の内容の両方を意味している。前者については、「意識はおのれの制限された満足を打破すべしという圧力を自ら内発的に蒙る」(Phän. S. 63)といわれている。ここでの意識の内発的な圧力は、「あるものがそれなりでありかぎりでおいては、まさにこの理由によって善しとは見ない理性」(ebd.)に由来する。この理性は思想ともいわれるので「思想は没思想性を侵害する」(ebd.)ともいわれる。後者については、《第37節》総註を参照されたい。

(1) 思想の流動化は、概念の自己運動となる。

Durch diese Bewegung werden die reinen Gedanken Begriffe und sind erst, was sie in Wahrheit sind, Selbstbewegungen, Kreise, das, was ihre Substanz ist, geistige Wesenheiten.

この運動のおかげで純粋な思想は概念となり、はじめてその純粹思想が真の姿であるところのものである。すなわち、諸自己運動であり、諸円環であり、そして、純粹思想の実体をなすところのもの、諸精神的本質性であることになる。

《註解》ここから、純粹思想の固定状態が流動化すると概念になることがわかる。そして、概念の一つ一つが自己運動の円環となる。それを精神的本質性とも呼んでいる。

〔思想の概念への転換〕

《第34節》

【要旨】

概念の自己運動が学であることの本性である。概念の自己運動は、必然的發展である。概念の自己運動のおかげで学への生成も必然的となる。予備部門は同時に必然的になる。それに対して偶然的哲学思索は、不完全な自然的意識のなすことである。『精神現象学』の世界性は、概念運動によって必然的となる。

(1) 概念の自己運動が学であることの本性である。

Diese Bewegung der reinen Wesenheiten macht die Natur der Wissenschaftlichkeit überhaupt aus.

このような純粋な本質性の運動、これが、およそ学であること一般の本性をなす。

《註解》「純粋な本質性の運動」とは前節(1)より概念の自己運動であり、『精神現象学』や『論理学』が学であることの本性となる。そして、否定性としての自己運動の論理は、本質性すなわち反省規定である。

(2) 概念の自己運動は、必然的發展である。

Als der Zusammenhang ihres Inhalts betrachtet, ist sie die Notwendigkeit und Ausbreitung desselben zum organischen Ganzen.

そのさい運動は、運動の内容の関連という面からみれば、その内容の必然性であり、内容が拡大していった有機的全体になることである。

《註解》 自己運動の内容が、必然的に拡大して有機的全体になる。このことが發展ということである。

(3) 概念の自己運動のおかげで学への生成も必然的となる。

Der Weg, wodurch der Begriff des Wissens erreicht wird, wird durch sie gleichfalls ein notwendiges und vollständiges Werden,

〔ここで当面の精神現象学の場合も,〕 知の概念に到達することになる道は、この運動によって、同じく必然的で欠けるところのない生成となる。

《註解》 この文は「この必然性のおかげで学へ到る道がそれ自身すでに学である」(Phän. S. 68) という『精神現象学』緒論の文と重なる。緒論では、この必然性は「発生したものは意識にとってはただ対象としてあるにすぎないのに、わたしたちにとっては同時に運動および生成としてもある」(ebd.) とされ、「意識にとって」ではなくて「わたしたちにとって」ある。

(4) 予備部門は同時に必然的になる。

so daß diese Vorbereitung aufhört, ein zufälliges Philosophieren zu sein,

したがって、この〔学の〕予備部門でも、哲学することが偶然的なものであるのを免れている。

《註解》 ここで『精神現象学』が、学に対しての予備部門であると同時に必然的哲学思索としての弁証法的体系であることの根拠が(3)までで提示されたことがわかる。それは「わたしたちにとって」のことなのである。

しかし、「意識にとっての」から「わたしたちにとって」が生成するためには、意識対象の非真理性を暴露する懐疑的方法が必要であることが「緒論」で「自己を完遂する懐疑主義」として語られている。「自己を完遂する懐疑主義」それ自体は、「緒論」にわずか一箇所だけ見出されるにすぎないが、意識の経験が、一つの固有の方法に従っていることを告げる唯一の道標である。「自己を完遂する懐疑主義」(sich vollbringender Skeptizismus) という言葉を熟視するならば、そこから懐疑主義の四つの姿態が自ずと分節化されてくる。つまり、ヘーゲルのいう懐疑主義は、①完遂されるべき原初の「自己」②「完遂すること」それ自体③完遂された「自己」④それらの一切を取り集める「懐疑主義」とから成る。

①まず、完遂されるべき原初の「自己」とは、当の懐疑主義それ自身であり、しかも、その原初的姿態である。そのような懐疑主義については、「意識の先入見に対して、現象的意識の全領野に向けられている懐疑主義は、真理が何であるかを吟味する資格を、精神につぎのようにしてはじめて与える」(Phän. S. 61) と説かれている。そして、それは、いかにしてかという、一つの自然的意識の持って

いる「もろもろのいわゆる自然的表象、思想的想念、ならびに私念に対する絶望（Verzweiflung）を成立させる」ことによって、それらが実在的であるようにという望みを、あらかじめ絶つというようにしてである。ここでの懐疑主義は、「現象的意識」が根差している「全領野」つまり自然的意識のもろもろの先入見に眼差しを向けて、それらの空しさを確信せしめる「絶望」にほかならない。したがって、懐疑主義の「絶望」の成立によって、自然的意識自身が、「現象的意識」つまり「現象知」へと純化されて、吟味の場へと置き据えられることになる。

②そのような「自己」自身を、すなわち、もろもろの自然的先入見に対する絶望を「完遂すること」それ自体とは、より具体的には、自然的意識によって思いなされた真理が何であるのかを吟味することである。また、いわゆる意識の自己吟味とは、詮ずるところ懐疑主義の姿態の一つにほかならない。その意識の自己吟味とは、端的にいえば、意識の対象と、その対象についての、己れの知を、当の意識自身が、相互に一致するか否かに関して比較することである。この点については、「意識は、一方では、対象についての意識であるとともに、他方では、己れ自身についての意識なのである」（Phän. S. 65）と明言されている。しかも、対象自身の変化にもとづいて、その両項（対象と知）の不一致が生じて、比較された両項とも取り消される。さらに、そのことによって、その都度、一定の対象から限定を受けていた意識が、たとえば、「知覚」や「道徳的自己意識」として存在する、という自らの存在についての確信を絶たれる。そして、一定の意識形態そのものが崩壊するに到る。以上の経緯からするならば、「完遂すること」それ自体とは、「絶望」の実施によって、最初の否定を加えられた自然的先入見に根差す意識の形態をさらに崩壊させるための、意識自身による比較の働きであるといえよう。

だが、他方で、この比較の働きは、①の「絶望」の実施を前提している。すなわち、懐疑的な比較が遂行されるためには、己れの対象を真なるものと思いなす自然的意識の信念確実性を、まずもって消去しておくことが不可欠なのである。また、そうでなければ、「意識にとって真なるもの」と「真なるものについての、己れの知」（Phän. S. 65）とが、相互に比較されうる別々の項として、同一の比較する意識に対してあるということが成立しないことになる。したがって、本来、①と②の手続きは、不可分の関係にある。

③このような手続きに従って完遂された所に示現してゆく「自己」とは、端的にいえば、意識自身によって経験されてゆく「道筋」（Weg）であり、弁証法ないし「弁証法的な運動」にほかならない。『精神現象学』の弁証法は、もっぱらこのような限定された場面だけで成立している。たとえば、「感性的確信は、この〔自我の中に真理があるという〕関係におけると同様の弁証法を、自らのもとの経験する」（Phän. S. 73）という文は、経験されてゆく運動としての弁証法の位置を、まことに精確に語っている。そして、そういう運動としての弁証法が、懐疑主義の一つの姿態であることは、たとえば、つぎの用例から容易に読み取ることができる。「直接にあるがままの否定的な運動としての弁証法的なものは、意識にとってはさしあたってそれに自らが翻弄されて、意識自身によって存在するのではないところの何か或るもののように見える。これに反して、この否定的な運動は、懐疑主義としては自己意識の契機である」（Phän. S. 141）。さらに閉却されてはならぬことは、この文で否定的な運動が「自己意識

の契機である」(傍点筆者)とされ、また、先の引用文では「感性的確信」が、弁証法を、自らのもとで執行する運動であることをまさに意味しているのである。それは「意識が、自ら自身のもとで、つまり、自らの知と自らの対象のもとで執行するこの弁証法的な運動」(Phän. S. 66)という言い回しからも充分得心されよう。それゆえに、いわゆる「概念の運動」を証示する学的叙述の方法は、もっぱら懐疑主義の弁証法的な姿態だけを取り出し、展開した所で語られている。

④最後に問われるべきは、①・②・③の一切を取り集める懐疑主義が、一つの固有の方法にほかならない点についてである。だが、これに反して、「学的方法」(Phän. S. 42)について説かれている「序説」から、『精神現象学』も「学」であるがゆえに、その方法は、もっぱら学的方法であると論決されるならば、それは早計である、といわねばならない。いかにも、「こういう運動の方法あるいは学〔哲学〕の方法」(Phän. S. 35)についての説明に従えば、『精神現象学』の運動の全体において精神の個々の形態を、「必然的な契機」として体系化してゆく方法もまた「学的方法」ということができるであろう。

しかし、これは、すでにのべたように、懐疑主義の手続きの結果である③の「道筋」にもっぱら係わるものである。むしろ、意識の経験を、その生成から考量するならば、それは、「学的方法」に従属することにけっしてならない。それどころか「緒論」第14節の言明に従うならば、一つの意識の経験は、全体としての学的歩みから、一度厳格に区別されなければならない。その区別の上に立って、「〔新たな対象の出現という〕事態の、この考察は、わたしたちの付加であり、それによって意識の諸々の経験の系列が学的歩みへと高められるが、この付加は、わたしたちが考察する意識にとっては存在しない」(Phän. S. 67)という文がはじめて語られる。この文から判明することは、個々の経験それ自体は、ただちに学的歩みをなすのではなくて、そのためには、系列をなすもろもろの経験に、そのつど、わたしたちが、新たな対象を顕示するための考察を付け加えなければならないことである。いわば、学的歩みは、学的ならぬ経験の系列に制約されて生成するのである。かくして、学的な歩みから相対的に自立しているかぎりでの意識の経験を領導するものを、固有の意味で方法と呼ぶことが許されよう。そして、それこそが「現象学の根源的問い」を遂行する際の方法なのである。

とはいえ、他方で、その方法が懐疑的方法であることは、むしろ『精神現象学』のいかなる箇所でも明言されていないことも事実である。にもかかわらず、懐疑主義の①・②・③並びに④の姿態が収斂する所を、関連語を頼りに、克明に追跡するならば、それらは方法という所で焦点を結ぶのを目撃することになる。その関連語というのは、周知の「絶望の道」ならびに「現象知が真実でないことを自覚的に洞察すること」(Phän. S. 61)という、「自然的意識の道」(ebd.)を説明する言葉である。最初の「絶望の道」とは、懐疑主義が絶望という手続きをとって切り拓きつつ、歩んでゆく道筋を意味している。したがって、この言葉は、歩まれてゆく道筋と、その道を切り拓いてゆく手続きとを同時に意味している。また、「現象知が真実でないことを自覚的に洞察すること」とは、絶望によって自ずと生じた現象知の非真実性を、意識自身がさらに吟味してゆく結果、成り立つ洞察の遂行にほかならない。それゆえに、意識の経験を領導する方法とは、歩まれてゆく道と、その道の切り拓き方がつながるところで成

り立つ洞察の遂行にはかならない。換言すれば、一定の手続きで道を切り拓きつつ、同時にその道を歩んでゆくという動態において、当の意識が、自らの有様を洞察し抜くことそれ自体が、まさしく方法なのである。

ところで、その一定の手続きとは、すでにのべた絶望の実施ならびに、それと不可分の関係にある自己吟味という懐疑主義の姿態を指している。また、歩まれてゆく道とは、弁証法ないし弁証法的な運動にかならない。そして、これら三つの姿態が、「自己を完遂する懐疑主義」の「懐疑主義」という言葉で、とりわけ意味されている根本的姿態に収斂している。すなわち、ヘーゲルの懐疑主義の根本的姿態は、懐疑主義の諸姿態を取り集める「現実的な遂行」(Phän. S.61)である。そして、それは、一つの力動的で、しかも或る種の緊張に支えられた営為である。したがって、その遂行が、一定の手続きと道筋に立脚する懐疑的洞察であるかぎり、いわば論証の補助線として、この遂行に対して、懐疑的方法という名称を与えることが許されるであろう。

さらに、ここで言い添えておかねばならないことが、一つある。それは、本来付言するまでもないことであるが、方法をそれが係わっている内容を捨象して定式化することは、とりわけヘーゲルについて語る場合には、極力避けられねばならないという点である。なぜならば、方法は、その本性からして、内容に応じて異なった相貌を呈するからである。したがって、『精神現象学』の「緒論」についても、そこで、意識の経験の方法が、十全に定式化され、しかも、方法の生ける全容が描出されている、と見なされてはならない。むしろ、「緒論」では、結局、方法の本性を考量した上で、もっぱら方法の典型的動態だけが点描されているにすぎない。しかし、同時に、その点描は、方法の全容へ接近する上での、確実な道標ともなることが閑却されてはならない。それゆえに、これまでの方法に関する一連の言明も、そのような道標から読み取ることでできた、礎石をなす事柄にとどまることを重ねて確認しておく。

(5) それに対して偶然的哲学思索は、不完全な自然的意識のなすことである。

das sich an diese und jene Gegenstände, Verhältnisse und Gedanken des unvollkommenen Bewußtseins wie die Zufälligkeit es mit sich bringt, anknüpft oder durch ein hin und her gehendes Raisonement, Schließen und Folgern aus bestimmten Gedanken das Wahre zu begründen sucht;

偶然的な哲学思索というのは、不完全な意識が行きあたりばったりに出会うあれこれの対象や関係や思想にかかずらったり、また、ある特定の思想をもとに、あれこれと論証や推理や演繹をもてあそんで真なるものを基礎づけようとしたりすることである。

《註解》ここでの不完全な意識というのは、「緒論」でいう自然的意識(Phän. S.60)である。それに対して偶然性を免れた意識は、現象知(*ebd.*)であり意識の形態として、『精神現象学』の必然的な契機となっている。なぜならば、意識の各形態に規定的概念が対応しているからである。そして、その意識の形態も精神の完全な形態としての絶対知に対しては精神の不完全な形態化(Phän. S.523)である。なぜならば、意識は自己意識と一致していないがゆえに不完全だからである。

(6) 『精神現象学』の世界性は、概念運動によって必然的となる。

sondern dieser Weg wird durch die Bewegung des Begriffs die vollständige Weltlichkeit des Bewußtseins in ihrer Notwendigkeit umfassen.

むしろ、この〔『精神現象学』の〕道は、概念の運動のおかげで、意識の完全な世界性を、それが必然的連関になるように包括するであろう。

《註解》 まず、概念の運動とは、意識の形態の非真理を明らかにする自己吟味とそれを学の必然的進行へと序列化する「わたしたちの付加」で成立する。つぎに、ここでの「意識の完全な世界性」とは、意識のすべての形態がまた世界のすべての形態であることを意味している。この世界としての精神の現象が「第二の超感性的世界」であることについては、《第26節》註解(17)を参照されたい。また、その世界の3つの意味と《第34節》(6)との関係については《第11節》註解(9)を参照されたい。とりわけ「世界」としての「事象そのもの」の論理構造がカテゴリーであることについては《第1節》註解(5)を参照されたい。

《第35節》

【要旨】

『精神現象学』の道が学の体系第一部である。『精神現象学』は、精神の定在のはじめで自己へ還帰してはいないからである。したがって、直接的定在の場面は学の体系第1部の規定である。学の予備部門についてはいつも固定した考え方が生まれるのでこれから論ずる。

(1) 『精神現象学』の道が学の体系第1部である。

Eine solche Darstellung macht ferner den *ersten* Teil der Wissenschaft darum aus, さらには、この道の叙述は、学の第1部をなす。

《註解》 ヘーゲルは、『精神現象学』第2版のための書き換えを序説《第31節》までしか済ませていなかったもので、ここに「学の第1部」という表現が残された。

(2) 『精神現象学』は、精神の定在のはじめで自己へ還帰してはいないからである。

weil das Dasein des Geistes als Erstes nichts anderes als das Unmittelbare oder der Anfang, der Anfang aber noch nicht seine Rückkehr in sich ist.

なぜならば精神の定在は、最初には、直接的なものであるところのはじめにほかならないが、はじめはいまだ精神が自己へ帰ってきたものではないからである。

《註解》 学の体系という観点から見ると、学の体系第1部『精神現象学』は、精神の定在であり、学のはじめの直接的なものであり、学の体系全体のおわりになって精神は自己に還帰する。これは、プロ

クロスの『神学綱要』で示されている自己還帰の神学体系と重なる。

(3) したがって、直接的定在の場面は学の体系第1部の規定である。

Das Element des *unmittelbaren Daseins* ist daher die Bestimmtheit, wodurch sich dieser Teil der Wissenschaft von den anderen unterscheidet.

したがって、直接的な定在という場面は、学の当該第1部門を他の諸部門から区別する規定性である。

《註解》直接的定在という場面とは、《第36節》(1)にあるように具体的には意識のことである。『精神現象学』とは「意識の諸形態化の体系」であり、それは中項にとどまり、精神は「普遍的精神」の場面で自己に還帰する。その点については、《第1節》(4)註解を参照されたい。

(4) 学の予備部門についてはいつも固定した考え方が生まれるのでこれから論ずる。

— Die Angabe dieses Unterschiedes führt zur Erörterung einiger fester Gedanken, die hierbei vorzukommen pflegen.

— この区別をあげたので、この点でいつも生じてくるいくつかの固定した考え方についても、やがて論じておかねばならないことになろう。

《註解》学の体系第1部の予備部門と他の本来的部門とを区別する規定に対していつも生じてくる固定した考え方についてもこれから論じられる。

結びに代えて

以上の第33節～第35節の邦語訳・注解・要旨から以下のことが解明された。学の予備部門としての『精神現象学』が学への道でもあることが、形成陶冶の過程として、①～④の段階に分節されている。まず、①表象の段階である個人の自然的意識から出発して、②普遍性一般としての思想の段階へ古代の形成陶冶を通して高まる。次に、③近代の形成陶冶を通して、その思想を流動化して、④概念の自己運動としての学の場面へ高まるのである。

引用文献略号

Phän.: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.